

妊娠希望 まず医師に相談

7月、娘が1歳になった。居間のソファやテーブルでつかまり立ちをする姿が、いとおしい。「健康に生まれてくれて、ありがとう」。

福岡県大野城市の女性(35)は、わが子に感謝する。女性には幼い頃、健診で心臓に異常が見つかった。通常、大動脈は左心室から、肺動脈は右心室から出ている。女性の場合、左右の心室が入り替わり、左心室から肺動脈、右心室から大動脈が出ていた。「修正大血

管転位症」という病気だ。左右の心室を仕切る壁にも穴が開いていた。「18歳ぐらいまでしか生きられない」。そんな言葉に耳にした記憶もある。長生きはできないと思い、夢や希望を持たないようにしてきた。

中学生の時、心臓の手術を受けると、体を動かすことが楽になった。医師から「次の手術は10年後か20年後」と言われた。「18歳を超えて生きられる」と未来

が開けた気がした。

高校生になると好きな男性もできた。その後、「子どもができたらいいな」と思うようになった。この男性とは2012年に結婚。妊娠について2人で真剣に考え始めた。「出産まで乗り切れるのか」「産んだ後に心臓が弱って寝たきりになったら……」

妊娠中は血液の量が増えるため、先天性心疾患の患者には心臓への負担が大きく、命に関わることもある。女性は5年ほど悩んだが、子どもが欲しいという思いを捨てきれなかった。妊娠前に医師と相談し、胎児に悪影響が及ぶ恐れがある薬の服用を中止した。

17年に妊娠すると、心臓の機能が低下し、十分な血液を送り出せなくなった。妊娠17週で国立循環器病研究センター(大阪府吹田市)に入院した。「自分の命が

危なく、この子に会えるか分からず、不安でした」。不整脈が起きる頻度も増えたため、妊娠35週の時、帝王切開で出産した。

2000g弱だった娘の体重は約8kgになった。順調な成長ぶりに、女性は大きくなるのをずっと見守りたい」とほほえむ。

先天性心疾患の女性が出産することも可能になってきたが、同センター産婦人科部長の吉松淳さんは「主治医に相談しないで妊娠することは絶対に避けてほしい」と訴える。

妊娠を希望する場合、最初に心臓の状態を確かめる必要がある。妊娠後は、先天性心疾患の専門医と産科医の両方に診てもらうことが欠かせない。

子育ても心臓に負担をかける。同センター小児循環器内科医長で、女性の現在の主治医を務める大内秀雄さんは「家族やパートナーと役割分担について、よく話し合っておくことが重要です」と指摘する。



1歳を迎えた娘と一緒におもちゃで遊ぶ女性